

開発主義の構造と心性 : 戦後日本がダムでみた夢と現実

著者	町村 敬志
学位授与年月日	2013-07-11
URL	http://doi.org/10.15083/00007214

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目： 開発主義の構造と心性—戦後日本がダムでみた夢と現実

氏 名： 町村敬志

1 論文の課題

戦後日本は、なぜかくも開発へと深く依存する社会となったのか。

本論文は、1956年に完成された戦後初の巨大プロジェクト、佐久間ダムを対象に、その建設をめぐる重層的かつ多面的な出来事の連鎖が結果的に、今日まで続く開発主義の構造と心性を形成する上で重要な経路としての役割を果たしたことを、多方面にわたる実証によって明らかにする。

研究史を振り返ると、冒頭の問いに対してはこれまで、大別して2つの視角から取り組みがなされてきた。第1に、戦後開発の歴史的起点に着目をするアプローチ(歴史アプローチ)、第2に、市場経済と政府主導の開発という異なる政治経済的要因が高度成長期において接続させられる過程に着目するアプローチ(政治経済学アプローチ)、がそれである。このうち歴史アプローチはさらに、戦後開発を「総力戦体制からの連続性」により理解する立場と、開発を「戦後レジーム」と見なす立場に分かれる。また、政治経済学アプローチは、開発を「市場経済を補完し成長に貢献する」部門として見る立場と、開発を「高度成長のもたらした格差・矛盾への対応」として見る立場とに大別できる。

だが、以上の研究史を全体として見た場合、そこには次のような課題が残されていた。

第1に、歴史アプローチが戦前・戦後の接続形態に議論を集中するのに対し、政治経済学アプローチは高度成長期における開発の作用を主要な検討対象とする。両者の間には時代設定の面でも論点の面でも明らかなズレがあった。なぜ戦後復興期に他ならぬ「開発」が新たに政策テーマとして浮上したのか。また、なぜ「開発」という新施策は、高度成長期の主要政策となるまでに拡大していったのか。冒頭の問いに答えるためには、これらの点が明らかにされる必要がある。

第2に、歴史アプローチにせよ、また政治経済学アプローチにせよ、各説はいずれも、国家レベルの政治経済現象としての開発に焦点を当てる。しかし、開発を「上から」の動員過

程としてだけ見るのは適当ではない。開発が全国化する前提には、広範な人びとによって開発が「受容」されていく社会的・文化的過程が存在している。両アプローチにはこの点の分析が欠けていた。

本論文は、復興から高度成長に向かう分岐点に位置する巨大プロジェクト「佐久間ダム」を対象に、国家／中央を起点とする開発政策が、政治・経済・社会・文化などの多様な回路を経ながら、人びと——ダムサイトの村人だけでなく、都市の大衆も含め——の生活世界へと浸透していく重層的過程を明らかにすることを課題とする。

2 論文の構成

序章 「充たされないもの」のありか——心性としての「開発」の起源を探る

第 I 部 国土に充たされていく開発——開発レジームのスケール重層的な形成過程——

第 1 章 「残された国土」に充たされていく開発——戦後復興期における開発ナショナリズム——

第 2 章 郷土建設から県域スケールの開発制度へ——「開発」化する理想と脱「理想」化する開発——

第 3 章 「開発」受け入れのローカルな基盤——動員と主体化の重層的過程——

第 4 章 ダム建設の記憶とその構造——「ぶれ」と「濁り」の創発力——

第 II 部 表象に埋め込まれていく開発——開発映像のポリティックス——

第 5 章 「開発映画」の誕生

第 6 章 立ち上げられる開発の表象——映画『佐久間ダム』は何を描き、何を描かなかったのか——

第 7 章 『佐久間ダム』を観た／観せたのは誰か——映像の浸透と再編される権力構造——

第 8 章 可視化と不可視化のポリティックス——映像化の現場——

第 9 章 映画人たちの動員と抵抗——「高度経済成長」の先へ——

終章 新しい「復興」の時代を前にして

3 各章の要旨

課題と方法をまとめた序章に続く第 I 部は、開発に向けた動員／参加の体制が、佐久間ダム建設をめぐる一連の出来事を通じ、国家・県域・村落という異なるスケールを横断しながら形成されていく過程を描き出す。

第 1 章「残された国土」に充たされていく開発は、まず国家レベルを舞台に、復興期の開発ナショナリズムと米国占領下の TVA 幻想とが会う場において、啓蒙のプロジェクトとしての開発政策が立ち上げられていく過程を明らかにする。

だが 1950 年代、開発とは「中央」主導ではなく「地方」主導の出来事であった。第 2 章「郷土建設から県域スケールの開発制度へ」は、「郷土」建設をめざす静岡県の開発運動が、佐久間ダムという外来の開発政策と呼応し、多くの軋轢を抱えながらも、そこから徹底的

に地元利益を引き出す道を選ぶまでの過程を描き出す。この過程を通じ、開発利権の分配を基盤とする政官財トライアングルの原型が形成される。

ただし「上から」の力だけでは開発は進まない。佐久間ダムは、戦後日本でもまれな「地元での強い反対のない」ダム開発であった。それはなぜか。第3章「「開発」受け入れのローカルな基盤」は、緊張をうちにはらむ開発事業が、村民によって受容されていく過程を検討する。集合行動に関するフレーム分析の手法により、情報ゲイトキーパーとしての役割を果たしたリーダー層による「開発する主体」の形成／動員の重層的なメカニズムが、村広報の内容分析などを通じて明らかにされる。

ダムの存在は、今もなお、開発に対する屈折した意識を住民に残している。第4章「ダム建設の記憶とその構造」は、2002年に著者らが実施した町民意識調査の結果をもとに、「開発の記憶」の構造（「強さ/弱さ」「濃さ/淡さ」）を明らかにした。開発を「抱きしめた」佐久間においては、「想起」ではなく「忘却」が「記憶の政治」の中心に位置する。開発幻想からの脱却のためには、ぶれや濁りを含む記憶をもう一度活性化させる必要がある。

以上が、開発現地へと順次降りていく過程を扱った第I部である。開発は、戦後日本において、制度／行為／心性として、なぜこれほどまで幅広く根を張ることができたのか。この問いに答えるためには、開発現地だけでなく、開発とは一見無縁の大都会を含めた全国においても、開発主義が立ち上げられる過程を明らかにする必要がある。第II部は、この課題に取り組む。対象とするのは、産業記録映画『佐久間ダム』（第1～3部、総集編、1954～1958年）である。

第5章「「開発映画」の誕生」は、まず『佐久間ダム』撮影に至る経緯について、偶然的要因と構造的背景の混在を明らかにする。

第6章「立ち上げられる開発の表象」は、映像内容の特質を、「何が描かれていないのか」という逆説から分析する。それは、電力の効用を訴えかけず、建設者の労苦を描かない。また建設の「犠牲者」に目を向けず、建設の「恩人」すらも登場させない、「奇妙な」産業記録映画であった。

しかし、地味なPR映画にもかかわらず『第一部』は300万人以上の観客を獲得する。「実際に観られた」点に本作品の最大の特徴があった。第7章「『佐久間ダム』を観た／観せたのは誰か」は、大蔵省主計官や天皇から都市大衆、村の移動映画教室に至るまでに広がった上映過程を、資料と調査によって再現する。多分に偶然的に組織化されたこの「観る」過程は、結果的に、生成途上にある開発レジームの主要アクターを「的確に」巻き込んでいく。ここにおいて『佐久間ダム』は「開発映画」としての位置を獲得していく。

とはいえ、映画制作者はスポンサーの言いなりだったわけではない。第8章「可視化と不可視化のポリティックス」は、発注企業側と映画制作者側との駆け引きの実際を、演出担当者の手書きノートなどをもとに詳細に再現していく。「ロマンと工程」か、技術記録か」というねらいが衝突するなかで、制作者側は妥協を余儀なくされる。しかしこの過程で盛り込まれた表現の「揺れ」は、文脈に応じた多様な解釈の可能性を作品に付与してい

く。

第9章「映画人たちの動員と抵抗」は、『佐久間ダム』完成以後も、「PR映画」製作の現場に留まり続けた黒木和雄らの模索を追いかける。資本主義批判の意図をも含む作品群は、映像の斬新さゆえに、皮肉にも、到来する企業社会のイメージ向上へと貢献する。だが、高度成長の進展とともに開発・産業のイメージ喚起力はむしろ低下し、開発映画の時代は終わる。

終章では結論を述べるとともに、2000年代に入り再浮上した開発ブームや開発主義の背景とその意味について論じた。

4 論文の結論

第1に、一つのダム、一本の映画によって開発主義イデオロギーが意図的に創出され流布された、というような単純な図式は、本論文の結論からもっとも遠いところにある。しかし、たとえば一本の映画すら、その企画から撮影、編集、上映、配給、鑑賞、批評に至る一連のプロセスを通じて、ローカル、ナショナル、そして国境を越えるアクターたちの行為と思いがけず共振していく。無数の行為の間に多様な関係が累積し、意図しない出来事の連鎖が姿を現す。これら連鎖に沿いながら「開発的なるもの」を支える心性が生成される。

第2に、しかし——あるいはそれゆえ——、「開発的なるもの」の中心は空洞のままであった。佐久間ダムは、確かに一時、戦後開発を生成する動きの中心にあった。だが、ダムの存在自体はもともと人びとの視野の外にあり、心性だけが高度成長期に引き継がれていく。

第3に、開発は、初めから不平等で格差生成的であった。開発現地の「総合開発」を期待して受容された佐久間ダムは、現実には大都市圏向けの電力供給をねらいとしていた。開発プロジェクトは、現地の地域社会を解体していっただけでなく、中心と周縁の格差を拡大・固定化していく効果をもっていた。

内側に大きな亀裂を抱えながらも、構造と心性に関わる制度が相互に補強し合いつつ国家単位で開発主義というひとつのレジームを形成していったのが、戦後日本の経験であり、それは震災後の現在にまで引き継がれている。